

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

平成9年度

八千代市教育委員会

例　　言

1. 本書は、八千代市内に所在する、長兵衛野南遺跡、池の台遺跡、新林遺跡、川崎山遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 調査は、八千代市教育委員会が平成9年度市内遺跡発掘調査事業として国庫及び県費の補助を受けて実施した。(No.5川崎山遺跡については、平成8年・9年度事業)
3. 調査遺跡の所在地、期間、調査原因は下記のとおりである。

No.	遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査原因
1	長兵衛野南遺跡	大和田新田字長兵衛野749-1	9.4.16 ～9.5.21	2,680m ² ／26,800m ²	店舗改築
2	池の台遺跡	萱田字池の台2238-7・9、2242	9.5.6 ～9.5.16	184m ² ／1,797m ²	共同住宅建設
3	新林遺跡	上高野字新林1201-1の一部	9.7.28 ～9.8.13	420m ² ／3,900m ²	共同住宅建設
4	川崎山遺跡 (e地点)	萱田字中台2276-1ほか	9.9.16 ～9.9.29	96m ² ／929m ²	宅地造成
5	川崎山遺跡 (d地点)	萱田町字川崎山757-1ほか	9.1.27 ～9.2.20 10.2.17 ～10.3.16	1,210m ² ／9,400m ² 760m ² ／5,280m ²	土地区画整理

4. 整理作業及び報告書作成作業は平成10年2月12日から3月16日までの期間行なった。
5. 本書の執筆は、常松がI・II-4を、森がII-1を、宮沢がII-2・3・5を行なった。
6. 本書の出土遺物の写真撮影は宮沢が行なった。

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 各遺跡の概要	3
1. 長兵衛野南遺跡	3
2. 池の台遺跡	5
3. 新林遺跡	7
4. 川崎山遺跡 e 地点	9
5. 川崎山遺跡 d 地点	12
報告書抄録	15
調査組織	21

挿図目次

Fig. 1 市内遺跡位置図	2	Fig. 7 新林遺跡遺構配置図	8
Fig. 2 長兵衛野南遺跡位置図	3	Fig. 8 川崎山遺跡 e 地点位置図	9
Fig. 3 長兵衛野南遺跡遺構配置図	4	Fig. 9 川崎山遺跡 e 地点遺構配置図	10
Fig. 4 池の台遺跡位置図	5	Fig. 10 川崎山遺跡 e 地点 1 号土坑平面図	11
Fig. 5 池の台遺跡遺構配置図	6	Fig. 11 川崎山遺跡 d 地点位置図	12
Fig. 6 新林遺跡位置図	7	Fig. 12 川崎山遺跡 d 地点遺構配置図	13

図版目次

図版 1 長兵衛野南遺跡	16
(1) 調査前現況	(4) 遺構検出状況
(2) 調査風景	(5) トレンチ出土遺物
(3) 遺構検出状況	(6) トレンチ出土遺物
図版 2 池の台遺跡	17
(1) 調査前現況	(4) 遺構検出状況
(2) 調査風景	(5) 遺構検出状況
(3) 遺構検出状況	(6) トレンチ出土遺物
図版 3 新林遺跡	18
(1) 調査前現況	(4) 遺構検出状況
(2) 調査風景	(5) 遺構検出状況
(3) 遺構検出状況	(6) トレンチ出土遺物
図版 4 川崎山遺跡 e 地点	19
(1) 調査風景	(4) P 1 セクション
(2) 遺構検出状況	(5) P 1 完掘状況
(3) P 1 セクション	(6) 完掘全景
図版 5 川崎山遺跡 d 地点	20
(1) 遺跡遠景	(4) 遺構検出状況
(2) 調査前状況	(5) 遺構検出状況
(3) 調査風景	

I 調査に至る経緯

八千代市教育委員会（以下「市教委」と略）では千葉県教育委員会（以下「県教委」と略）の指導のもと、開発業者からの埋蔵文化財の有無とその取扱いについての照会（以下「照会」と略）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち確認調査が必要と判断される遺跡については、国庫と県費の補助を受け発掘調査を実施している。

平成9年度調査

本市は首都圏のベッドタウンとして宅地開発が進んだ地域である。平成8年4月の東葉高速鉄道の開業は、本市のこの性格をより強める契機となっている。本年度の発掘調査は、この沿線の店舗改築と市域南部の市街化区域における開発行為に伴うものであった。

長兵衛野南遺跡 平成9年2月、京成バラ園芸株式会社から店舗改築のため照会が提出された。これを受け市教委と現地踏査を実施した。当該地は周知の遺跡範囲ではなかったが、一部に縄文土器片等の散布を確認した。照会面積が10,000m²以上とのため県教委が回答する案件であったので、この旨を県教委に副申し、県教委及び市教委による現地踏査を実施した。この結果新発見の遺跡であることを確認し、縄文土器等が散布する区域を中心とした26,800m²について、確認調査が必要と判断した。遺跡名は長兵衛野南遺跡とした。これに基づき市教委は事業者との協議を行い、4月に事業者から文化財保護法57条の第2項の規定による土木工事の発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出されたのを受け、調査の準備に入った。現地には苗木や鉢等の障害物があったため事業者がこれらを撤去した。準備の整った4月16日に調査を開始した。

池の台遺跡 平成9年3月、花井保氏から共同住宅建設のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施したところ、対象地内に土師器等の遺物を確認した。周知の遺跡範囲内であり、隣接地や周辺部の過去の調査で遺構が検出されているため、確認調査が必要と判断した。4月に土木工事の届が提出され、準備の整った5月6日に調査を開始した。

新林遺跡 平成9年5月、岩井きみ氏から共同住宅建設のため照会が提出された。現地踏査を実施したところ、対象地内に縄文土器片が比較的多く散布していた。そこで、谷を埋め立てた区域を除き、周知の遺跡範囲内に当たる3,900m²について確認調査が必要と判断した。7月に土木工事の届が提出され、準備の整った7月28日に調査を開始した。

川崎山遺跡e地点 平成9年8月、新日本建設株式会社から宅地造成のため照会が提出された。現地踏査を実施したところ、土師器等の遺物を確認した。市内を代表する遺跡である川崎山遺跡の範囲内であることも考慮し、確認調査が必要と判断した。8月に土木工事の届が提出され、準備の整った9月16日に調査を開始した。

平成8年度・9年度

川崎山遺跡d地点 平成8年6月、財団法人八千代市開発協会から区画整理のため照会が提出された。周知の遺跡範囲内であり、隣接地で集落跡が確認されており、現地踏査で遺物を多く確認した。県教委が回答する案件であったためその旨を副申し、県教委及び市教委による現地踏査を行った。8月に県教委から「全域遺跡有り」の回答があり、これを受け市教委は市都市整備課・開発協会と協議を重ねた。12月、八千代市菫田町川崎山土地区画整理組合設立準備委員会が発足、同委員会から土木工事の届が提出された。対象地の大半は畠地であるため、作物の収穫状況などを考慮し調査可能な部分9,400m²について、平成9年1月27日に調査を開始した。8年度に調査できなかった区域については平成9年度に行うこととし、5,280m²について平成10年2月17日に調査を開始した。



八千代都市計画基本図



Fig. 1 市内遺跡位置図 S = 1 / 50000

II 各遺跡の概要

1. 長兵衛野南遺跡

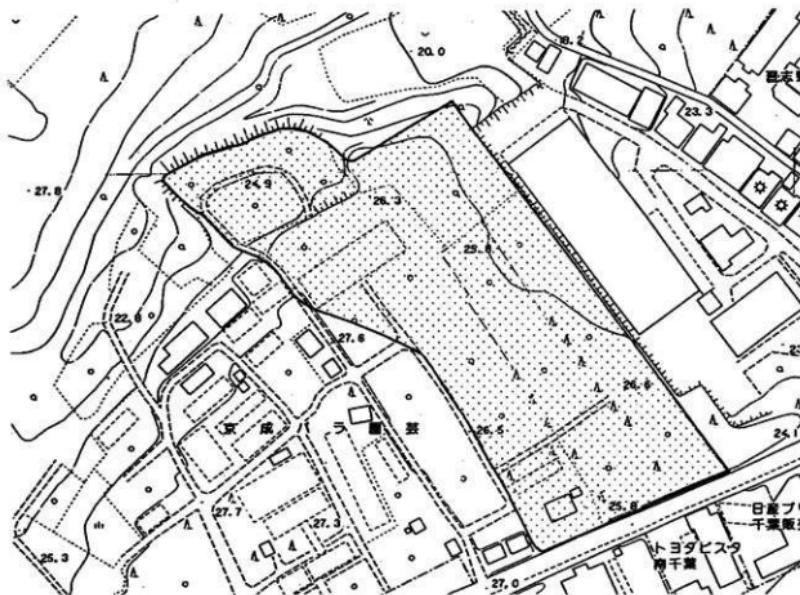


Fig. 2 長兵衛野南遺跡位置図 S=1/2500

遺跡の位置と立地

長兵衛野南遺跡は、桑納川南岸に至る谷の最奥部の台地上平坦部に位置する。川までは距離にして1.7km、台地の標高は約26mで低位面との比高差は13mを測る。同一支谷において今までのところ調査された遺跡はない。

調査の方法と経過

調査は磁北の方向で10m間隔に2m×5mのトレンチを設定し、適宜その間にトレンチを設け遺構確認を実施した。現地では植木鉢が1000以上の単位で置かれていたので、調査と撤去を並行して行った。

調査期間は平成9年4月16日～同年5月21日で、4月16日～23日方眼杭及びトレンチ設定、4月24日～5月1日重機による表土除去、5月2日以降トレンチ清掃及び遺構確認作業を行う。5月12日以降一部遺構調査を実施した。21日機材撤収を行い調査を終了した。

調査の概要

本遺跡の基本層序は、谷部及び平坦部においてⅢ～Ⅳ層の厚さが異なるが、Ⅰ表土ないし盛土、Ⅱ黒色土（腐食上）、Ⅲ褐色土（新期テフラ層）、Ⅳ暗褐色土（谷に近い部分では黒色土にやや近い）、Ⅴ暗黄褐色土（ソフトローム漸移層）、Ⅵソフトローム層となっている。遺物はⅢ層下部～Ⅳ層中位にお

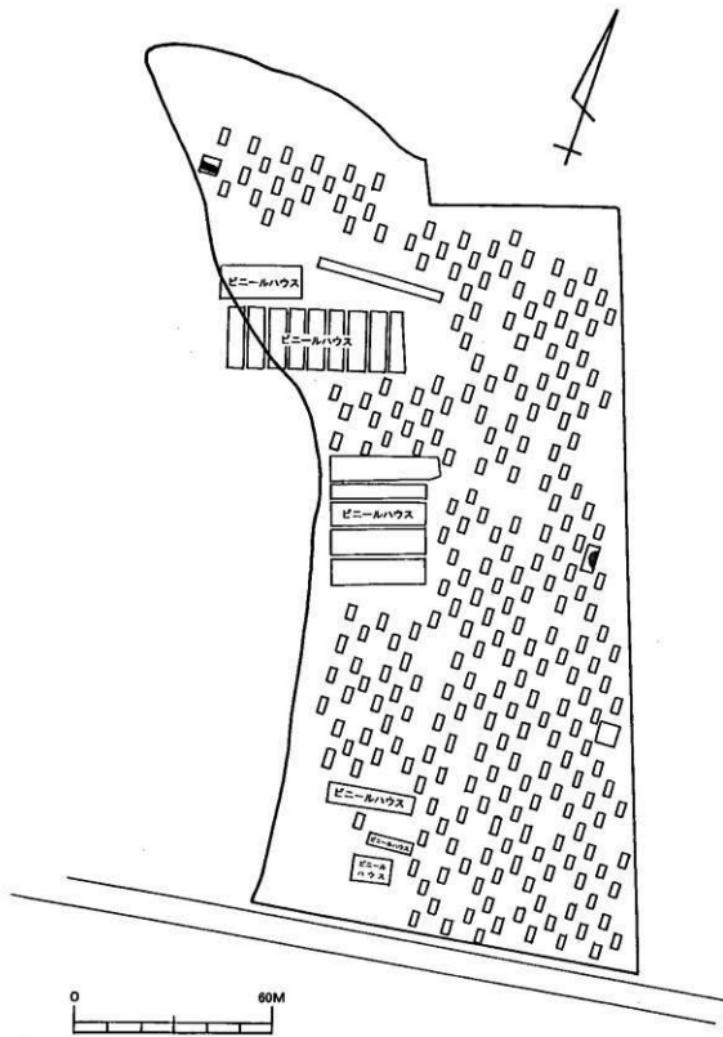


Fig. 3 長兵衛野南遺跡遺構配置 S = 1 / 1500

いて包含している。確認面はVI層上面において行った。

調査の結果、縄文中期の整穴住居跡1軒、時期不明の溝状遺構1条を確認した。整穴住居跡の規模は不明であるがプランは部分的に不整形圓形を呈する。IV層中を掘り込んでソフトローム中を床面としている。覆土は暗褐色土で、黒色土、焼土粒を小量混入する。時期は加曾利E II～III式の遺物が出土している。溝状遺構は北側の台地先端部で確認された。幅3.1m、深さ0.6mを測る。設定したトレーンチでは連続した方向は確認できなかったがおおむね東西方向と考えられる。覆土は黒褐色土でよく締まっている。遺物が出土していないため時期は不明だが、新しい時期の境界溝とは考えにくい。

出土遺物は、縄文時代では中期阿玉台式の土器片が台地先端部に少量、加曾利E式の土器片が台地中央東部分に少量、後期場ノ内、加曾利B式の土器片が台地南部分にごく少量出土している。土器以外では阿玉台式の土器片錐、縄文期の磨石、石皿片が出土した。現地踏査時において奈良・平安時代の遺物が採集されているがこの確認調査においては該当する遺構、遺物は検出されなかった。

調査のまとめ

本遺跡は調査の概要の中ではふれなかつたが、台地中央を東西方向に分断した形で谷が入っており2つの台地で構成されていることが判つた。その南側台地の北緩傾斜面において、縄文中期の整穴住居跡が検出された訳である。遺物量は前述したが、縄文期の土器片が少量であり、他の時代については皆無であった。このことからも本遺跡の主体は縄文時代であり、しかも中・後期に限定されるようである。

2. 池の台遺跡



Fig. 4 池の台遺跡位置図 S=1/2500

遺跡の位置と立地

池の台遺跡は、市域中央を流れる新川西岸の、小支谷が樹枝状にのびる台地上平坦面に立地する。標高は約24m、南側に伸びている谷との比高差は約8mを測る。

本遺跡は、いわゆる萱田遺跡群を形成する遺跡の一つであるが、近隣の遺跡として、北方に白幡前遺跡が、南側の谷を隔てて川崎山遺跡が展開する。周辺の調査例としては、調査区北方の3地点で、昭和54年にa地点を、同59年にb地点を、同60年にc地点を調査している。a地点では縄文時代の土坑4基、平安時代の住居跡6軒、振立柱建物跡1棟等が調査され、c地点では平安時代の住居跡2軒等が調査されている（註1）。b地点は現在整理中である。調査区の現況は畑で、a～c地点と至近距離に位置し、今回の調査は池の台遺跡d地点となる。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状にあわせて10m間隔に2×4mのトレーンチを設定し掘削を行い、遺構の検出状況を見ながら更にトレーンチの増設、拡張を行い遺構の捕捉に努めた。

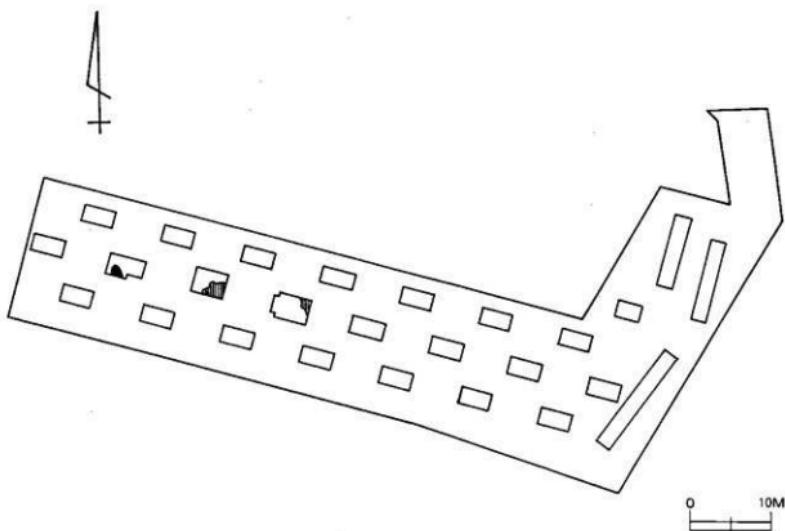


Fig. 5 池の台遺跡遺構配置図 S = 1/600

調査期間は、平成9年5月6日～5月16日で、5月6日～12日の間に機材搬入、表探、トレント設定を行い、12日～13日に手掘りによる包含層調査を実施、13日、重機による表土除去作業、13日～15日、遺構確認作業、15日～16日セクション調査を実施し調査を終了した。

調査の概要

調査区内は耕作が著しく、基本層序はⅠ表土層（耕作土）、Ⅱソフトローム層となっていた。遺構確認作業は、Ⅱ層上面で行い、地表面から平均して約50cmでソフトローム層に至っていた。

調査の結果、平安時代の住居跡2軒、縄文時代の土坑1基を検出した（注2）。住居跡は検出状況から方形の4m規模のものと推定される。遺物は奈良・平安時代の土師器小破片が主体的に出土しているが、全体として出土量は少ない。その中で、住居跡を検出したトレントから土師器皿形土器等が出土している。

調査のまとめ

今回の調査で平安時代の住居跡を2軒検出したわけであるが、これらの住居跡は過去3地点の調査例や、広くは白幡前遺跡に代表される葦田遺跡群に大きく展開する奈良・平安時代の集落と有機的に関連するものと考えられる。過去に調査されている集落と、今回検出された住居跡とが、時間的、空間的にどのような位置関係にあるか明らかにしていかなくてはならない。過去の調査成果を踏まえながら、今後さらに分析を進めたい。

註1 八千代市遺跡調査会 「池ノ台遺跡」 1979年

八千代市教育委員会 「池の台遺跡」 1986年

註2 土坑は、その後の本調査の成果から縄文時代の落とし穴と判明。詳細は、現在整理中。

3. 新林遺跡



Fig. 6 新林遺跡位置図 S=1/2500

遺跡の立地と概要

新林遺跡は市域中央を流れる新川の東岸、辺田前から東に大きく入り込む谷の最奥部の台地上に位置しており、標高は約27mを測り、台地と谷との比高差は約9mである。

近隣の遺跡として、遺跡北方の小支谷を隔てて、二重堀遺跡が、北西方向には、稲荷前遺跡が、さらに、南西方向の小支谷を隔てて、黒沢池上遺跡が展開している。周辺の調査例としては、平成6年に調査区南東の近隣地のa地点を、同年に西方隣接地のb地点を調査している。また、北側隣接地において平成5年に二重堀遺跡a地点、同6年に二重堀遺跡b地点の調査を実施している。新林遺跡a地点では縄文時代早期の落とし穴8基と溝1条、同b地点では縄文時代の土坑1基が調査され、二重堀遺跡a地点では旧石器時代の遺物集中点2カ所と縄文時代前期の竪穴状構造1基、土坑35基、遺物包含層1カ所、同b地点では縄文時代の土坑2基がそれぞれ調査されている。また、平成5年以降、周辺において調査が頻繁に実施されている地区である（註1）。調査区の現況は畑で、今回の調査は新林遺跡c地点となる。

調査の方法と経過

調査は、調査区の形状にあわせて10m間隔に2×4mのトレンチを設定し掘削を行い、以降の検出状況を見ながら、更にトレンチの増設、拡張を行い遺構の捕捉に努めた。

調査期間は、平成9年7月28日～8月13日で、7月28日～1日の間に機材搬入、表探、トレンチ設定を行い、1日～4日に手掘りによる包含層調査を実施、5日～6日に重機による表土除去作業、6日～8日に遺構確認作業を実施し、11日～13日セクション調査等記録作業を行い調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は、I表土層、II暗褐色土層、IIIソフトローム層となっていた。耕作を受けているためII層は調査区の南側の一部で検出されたのみであった。また調査区北側においては盛土造成が行われており、重機で2.5m程度掘削を試みるが、地山の検出はできなかった。遺構の確認作業はIII層上面で行い、地表面から平均して約40cmで確認面に到達していた。

調査の結果、縄文時代の住居跡2軒と土坑18基、時期不明の溝1条を検出した。住居の覆土はロームを多量に含む暗褐色土で、また、検出状況から5m規模の不整形の住居跡と推定される。遺物は調査区南側を中心に縄文土器が比較的多く出土した。そのなかでも加曾利E式の土器片が主体を占めていた。

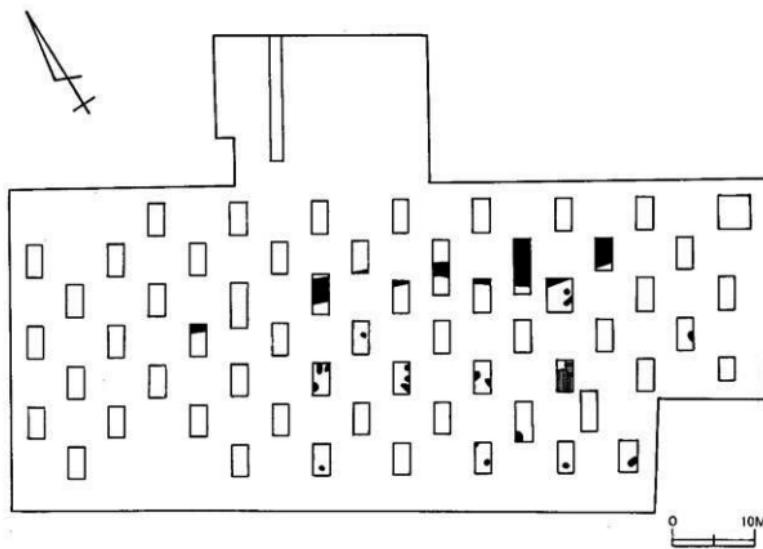


Fig. 7 新林遺跡遺構配置図 S=1/600

調査のまとめ

新林遺跡が所在する上高野地区は、これまでにも断続的に数度の調査が実施されており、遺構、遺物の密度が薄い地区とされ、検出される遺構も落とし穴等で住居跡が検出されなかつたのであるが、今回の調査で初めて上高野地区において縄文時代の住居跡が検出されたことは注目される。新林遺跡そのものの広がり、さらには、当地域における縄文時代の遺跡立地、土地利用の在り方などを考える上で、ひとつの手掛かりとなりうるであろう。いずれにしても、過去の調査成果を踏まえながら、今後の調査例を増やし、考察を進めていきたい。

註1 八千代市教育委員会 「平成6年度 八千代市埋蔵文化財年報」	1995年
「八千代市埋蔵文化財年報 平成6年度版」	1996年
「市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度」	1997年

4. 川崎山遺跡 e 地点

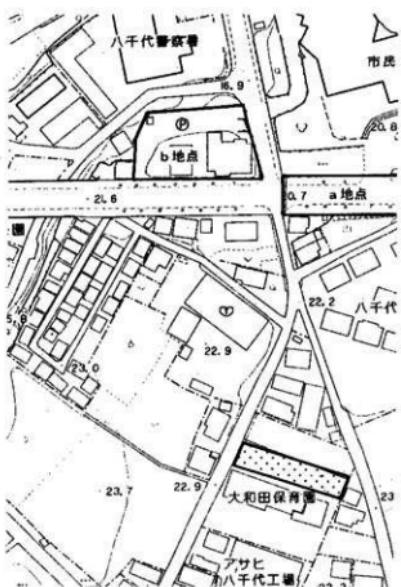


Fig. 8 川崎山遺跡 e 地点位置図 $S=1/2500$

調査期間は平成9年9月16日～同年9月29日である。検出された遺構が土坑1基のみであったので、この土坑の本調査も併せて行った。16日トレンチ設定及び重機表土剥ぎ、17日～18日にトレンチ土層調査、遺構検出及び遺構調査、19日～22日・29日に遺構完掘及び平面図作成、埋め戻しは遺構以外の部分を23日に、遺構部分を29日に行った。

調査の概要

調査区の基本層序はⅠ表土層（耕作土。しまりの弱い黒褐色土）、Ⅱ黒褐色土層（ロームブロックが混じる擾乱された土。Ⅰよりはしまり強い）、Ⅲソフトローム層となっている。Ⅰ層は厚さ15～30cm、Ⅱ層は調査区北西端のB2-1グリッドで厚さ20～30cmを計るが、調査区南東半分ではほとんど認められない。これを反映し地表面からソフトローム上面までの深さは、調査区北西部では45～50cmであるが、南東部では30cmと浅くなっている。

検出遺構はC3-1グリッドの土坑1基のみで、これを1号土坑とした。ほかにはB2-4グリッドで検出面1.9×1.4m、深さ56cmの風倒木痕を確認した。

遺物はB2-1グリッドから陶器片と鉄滓が1点ずつ出土したのみである。

1号土坑

検出面は地表下36～40cmのソフトローム上面に当たる。暗褐色土の楕円形プランで規模は2.3×1.7mである。バックホーの爪痕のような擾乱が認められるものの、依存状態は概ね良好である。

掘削方法は2段階に分け、覆土8層までを半掘・記録・全掘した後、さらに下層を掘削した。

遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は市域の南部、新川の西岸に位置する。南北を新川の低地から入る谷によって画された台地上一帯が範囲である。本遺跡について過去において4箇所の地点（a～d地点）で調査を行っており、その結果旧石器時代から平安時代に至る遺構・遺物が確認されている。萱田地区遺跡群等とともに新川西岸遺跡群の一角を占める遺跡と言える。今回の調査区域はe地点である。

e地点は本遺跡の中では中央西寄りに位置する。谷の影響がほとんど感じられない台地中央の平坦地であり、標高約23m、現況は畑地である。

地表面観察では、土師器・陶器・砥石・鉄滓等の破片を確認し採集した。古代以降の遺構が存在する地点と予想したが、結果は後述するように予想に反したものとなった。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、2m×4mのトレンチを10m間隔で設定し、必要に応じて拡張を行った。トレンチ16箇所約96m²を掘削し、遺構検出に努めた。

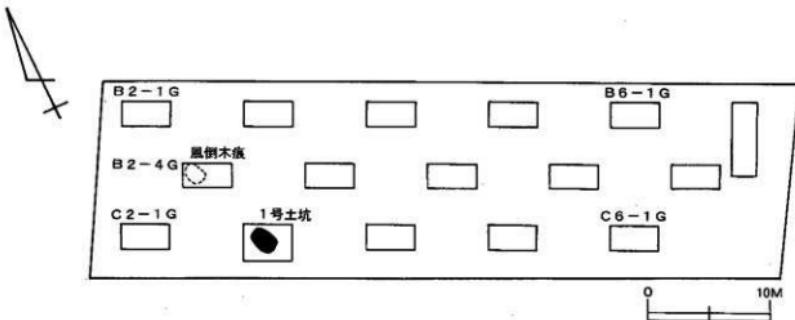


Fig. 9 川崎山遺跡 e 地点遺構配置図 S=1/400

覆土の状態は以下のとおりである（番号はFig.10のセクション図の数字に対応）。1：暗褐色土（褐色土が斑状に混じる）、2：暗褐色土（径2～3mm以下の黄色粒子を一樣に含む。炭化物をごく少量含む）、3：暗褐色土（炭化物を含み黒色みがある）、4：暗褐色土（3と5の中間的な様相を示す）、5：暗褐色土（褐色土が混じる）、6：褐色土（径1cmのロームブロックを含む。ざらつとした感触）、7：暗褐色土（しまり強い。上下層との区別明瞭。褐色土・ローム粒子含む。焼土粒子ごく小量含む）、8：褐色土（粘性強い。しまり強いが、部分的に脆い所がある）、9：褐色土（しまり強い。所々に亀裂が入る。炭化物・赤色粒子微量含む）、10：褐色土（灰白色の粘土を含む）、11：褐色土（やや赤色を帯びる。しまり弱くざらつとしている。暗褐色土を部分的に含む）。

覆土は1～4層、5～7層、8～11層の3ブロックに分けることができる。1～4層は各層の差が不明瞭であり自然堆積の印象を受ける。5～7層はロームブロックを含み、人為的な埋土の印象を受ける。8～11層はロームを主体とする。自然のローム層に近い状態でよくしまっている。一気に埋め戻し突き固めたものと解釈したい。

深さは最深部で2.3mを計る。底面は短軸0.2～0.3m、長軸1.6mを計る。壁は短軸では概ね垂直で部分的に段やわずかなオーバーハングが認められる。長軸では中段付近がオーバーハングする。

遺物は5層付近から出土した焼けた粘土塊1点のみである。3×2×1cm程の小片で、淡褐色、焼成は良い。纖維が含まれており早期後半の土器片の一部と見えなくもないが、器面が残っておらず判断に苦しむ。

本遺構は、その形態から縄文時代に属する落とし穴状土坑と判断される。

調査のまとめ

前述したように今回の調査結果は表面採集の所見とは異なり、縄文時代の落とし穴状土坑1基であった。川崎山遺跡では、落とし穴状土坑はb地点で1基、c地点で12基検出され、縄文時代遺構の主体となっている。それぞれの所属時期の問題はあるが、台地縁辺だけでなくe地点という台地中央部にも同遺構が存在したことにより、広く狩場として土地利用されていたことが想像できる。

また、この種の土坑覆土には、人為的埋土と思われる土が認められる。落とし穴として使用した後、危険のない程度に埋め戻すという行為が習慣となっていたものと思われる。危険回避という合理的な理由とともに、収穫への感謝という儀式的行為が伴った可能性もある。7層や9層に見える焼土や炭化物が火を使った儀式的行為を反映するものかもしれない。

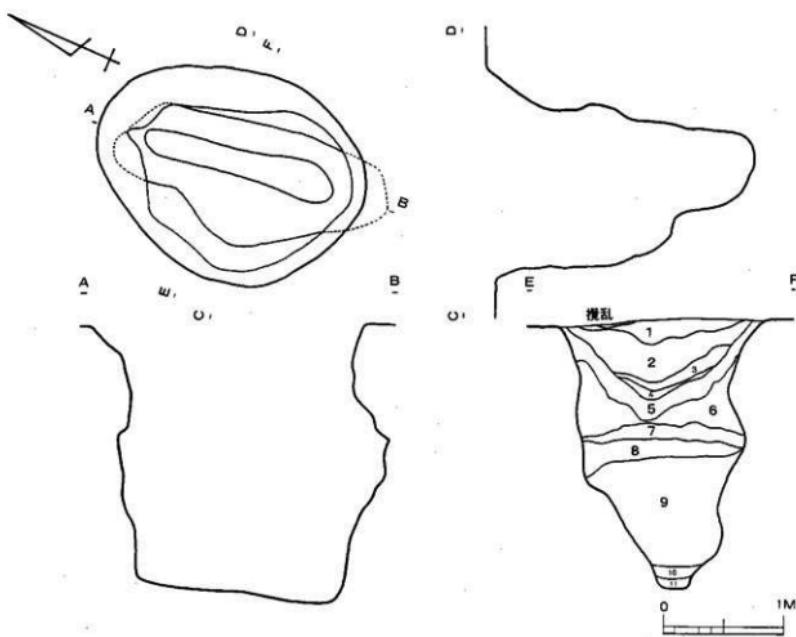


Fig. 10 川崎山遺跡 e 地点 1号土坑平面図 S = 1/40

5. 川崎山遺跡 d 地点（平成 8 年度・9 年度事業）

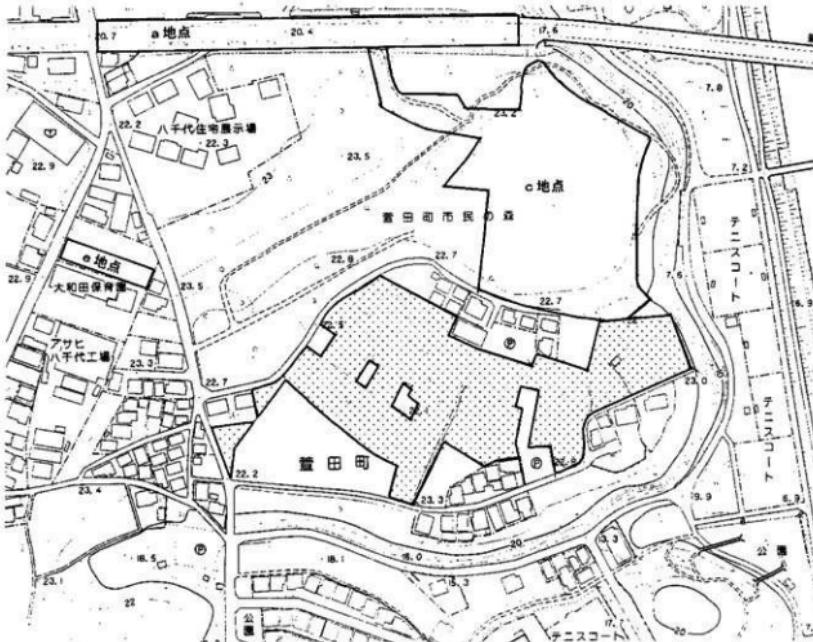


Fig. 11 川崎山遺跡 d 地点 位置図 S = 1/3000

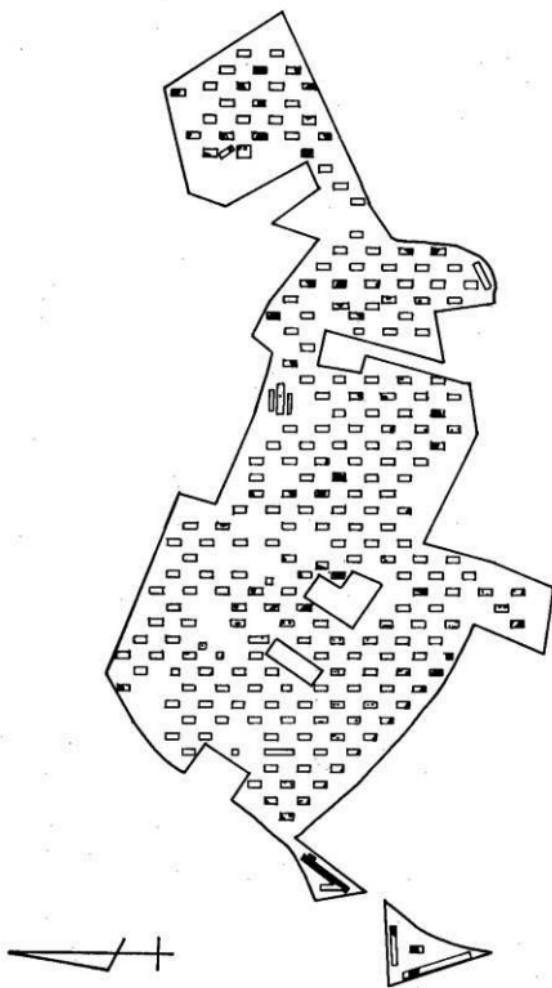
遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は、市域中央を流れる新川の西岸の台地上平坦面に位置し、南北を新川から入り込む谷によって区画されている。標高は約22mで、新川の低地との比高差は約13mを測る。

近隣の遺跡としては、遺跡北側の谷を隔てて、上の台遺跡、白幡前遺跡、池の台遺跡が展開し、南側の谷を隔てて、上の山古墳、上の山遺跡、北裏畠遺跡が展開する。川崎山遺跡を取りまく周辺地区は、過去、千葉県文化財センターによる董田地区遺跡群の調査をはじめ、比較的多くの調査が実施されている地区であるが、川崎山遺跡に関しては、昭和59年調査のa地点、平成3年調査のb地点、平成6年調査のc地点の3地点での調査が行われている。a地点では、弥生時代後期の住居跡4軒、古墳時代中期の住居跡3軒等が調査され、c地点では、旧石器時代のユニット1カ所、縄文時代落とし穴12基、弥生時代後期の住居跡25軒、古墳時代前期の住居跡23軒、同後期の住居跡2軒、奈良時代の住居跡1軒が調査されている。b地点は現在整理中である。今回の調査は川崎山遺跡d地点となり、過去3地点の南方に位置し、現況は畠である。また、d地点調査と平行してe地点の調査も行われている。（本書掲載）

平成8年度、9年度の2年度に分けて調査が行われたため、調査区域内の構造配置等の位置的整合性を図るため、また、開発等による地形的変動に対応するなどの理由から、調査対象区域全域に公共座標

Fig. 12 川崎山遺跡 d 地点遺構配置図
 $S = 1/1500$



による20m間隔の基準点測量を行った。この基準点を基に10m間隔に2×4mのトレンチを設定し掘削を行い、遺構の検出状況を見ながら、更にトレンチの増設、拡張を行い、遺構の捕捉に努めた。

調査は平成8年実施の1次確認調査と平成9年実施の2次確認調査の2期にわたる。1次確認調査の調査期間は平成9年1月27日～2月20日で、調査対象区域東側の台地先端部から平坦面にかけての調査を行った。1月27日～2月4日の間に機材搬入、表採、トレンチ設定を行い、2月3日～12日に手掘りによる包含層調査を実施、2月7日～13日に重機による表土除去作業、2月12日～19日に遺構検出作業および、セクション調査・写真撮影等の記録作業、20日機材撤収を行い調査を終了した。

2次確認調査の調査期間は平成10年2月17日～3月16日で、調査対象区域西側の台地平坦面の調査を行った。2月17日～19日の間に機材搬入、表採、トレンチ設定を行い、2月19日～26日に手掘りによる包含層調査を実施、2月26日～3月10日に遺構検出作業およびセクション調査・写真撮影等の記録作業16日機材撤収を行い調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序はⅠ表土層、Ⅱ黒褐色土層、Ⅲ褐色土（新期テフラ）層、Ⅳ暗褐色土層、Ⅴソフトローム層となっていた。ただし、Ⅱ～Ⅳ層は、状態の良い台地先端部で一部検出されたのみで、大部分のトレンチではⅠ層とⅤ層のみで、地表から50cm程度でソフトローム層に達している。遺構確認は、Ⅴ層上面で行った。

調査の結果、弥生時代後期の住居跡9軒、古墳時代前期の住居跡25軒、縄文時代の落とし穴1基、縄文時代の土坑6基、古墳時代前期の土坑1基、時期不明の土坑66基、時期不明の溝13条を検出した。弥生時代の住居跡は、検出状況から長軸6m前後の小判形の住居跡、同様に古墳時代前期の住居跡は5m規模の隅丸方形の住居跡と推定される。

出土遺物は弥生時代後期の土器片と古墳時代前期の土器片が出土しているが、傾向としては、調査区東側の台地先端部に集中していた。

旧石器時代については、台地先端部で、遺構の検出されていないトレンチを対象に、5ヵ所20m²の調査を行ったが、遺物は検出されなかった。

調査のまとめ

今回の調査で住居跡が合計34軒検出され、大規模な集落が展開していることが明らかにされた。検出された住居跡群は台地の先端部に集中しており、この集落跡は、c地点で調査された集落と同一の集落と考えられる。また、調査区西側から住居跡が検出されなくなることから、当集落における、居住域西側の限界範囲も明らかにすることができた。

調査区西側では住居跡は検出されていないが、遺跡を区画している南側の谷に近い調査区南西部では縄文時代と思われる土坑を散見的に6基検出している。このことは、台地先端部に集落を営む弥生時代以降とは異なる縄文時代独特の土地利用法を考える上で興味深い。縄文時代の落とし穴がc地点で12基c地点で1基検出されていることも、示唆的である。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が主たる検出遺構であるが、過去の調査成果を踏まえながら考えていくと、川崎山遺跡は旧石器時代から奈良時代に至る複合遺跡で、しかも、広範囲に展開していることが窺える。今後、一調査にとどまらない、より総合的な考察が必要とされるであろう。

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ へいせいい9ねんど
書名	千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度
編集者名	森竜哉・常松成人・宮沢久史
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 電0474-83-1151
発行年	西暦 1998年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長兵衛野南遺跡	八千代市大和田新田字 長兵衛野749-1ほか	12221		35度 43分 42秒	140度 5分 30秒	1997.4.16～ 1997.5.21	2,680m ² ／26,800m ²	店舗改築
池の台遺跡	八千代市萱田字池の台 2238-7・9、2242	12221	240	35度 43分 13秒	140度 6分 30秒	1997.5.6～ 1997.5.16	184m ² ／1,797.18m ²	共同住宅 建設
新林遺跡	八千代市上高野字新林 1201-1の一部ほか	12221	233	35度 43分 3秒	140度 8分 1秒	1997.7.28～ 1997.8.13	420.5m ² ／3,900m ²	共同住宅 建設
川崎山遺跡(c地点)	八千代市萱田字中台 2276-1ほか	12221	241	35度 43分 9秒	140度 6分 42秒	1997.9.16～ 1997.9.29	96m ² ／929.19m ²	宅地造成
川崎山遺跡(d地点)	八千代市萱田町字川崎山 757-1ほか	12221	241	35度 43分 6秒	140度 6分 50秒	1997.1.27～ 1997.2.20 1998.2.17～ 1998.3.16	1,210m ² ／9,400m ² 763m ² ／5,280m ²	土地区画 整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長兵衛野南遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡1軒、溝1条	縄文土器、石器	無し
池の台遺跡	集落跡	平安時代	住居跡2軒、土坑1基	平安時代土器	無し
新林遺跡	散布地	縄文時代	住居跡2軒、土坑18基	縄文土器	無し
川崎山遺跡e地点	散布地	縄文時代	落し穴土坑1基	縄文土器、古墳時代土器	無し
川崎山遺跡d地点	散布地	弥生時代 古墳時代	住居跡34軒、 落し穴土坑1基	弥生土器、古墳時代土器	無し

図版1 長兵衛野南遺跡



(1) 調査前状況



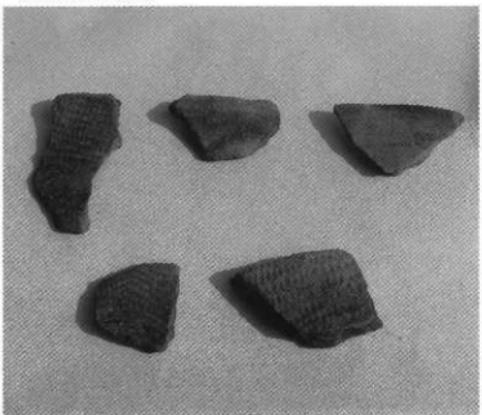
(2) 調査風景



(3) 遺構検出状況



(4) 遺構検出状況



(5) トレンチ出土遺物



(6) トレンチ出土遺物

図版2 池の台遺跡



(1) 調査前状況



(2) 調査風景



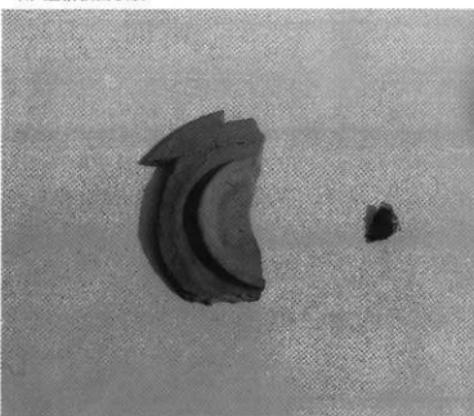
(3) 遺構検出状況



(4) 遺構検出状況



(5) 遺構検出状況



(6) トレンチ出土遺物

図版3 新林遺跡



(1) 調査前状況



(2) 調査風景



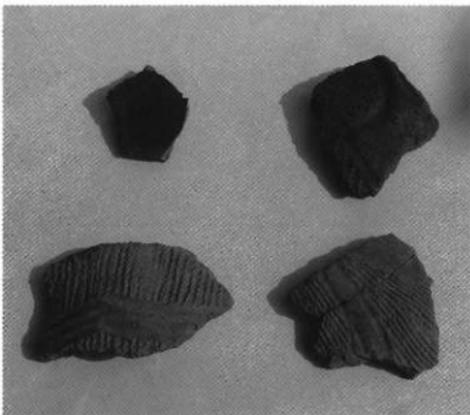
(3) 遺構検出状況



(4) 遺構検出状況



(5) 遺構検出状況



(6) トレンチ出土遺物

図版4 川崎山遺跡e地点



(1) 調査風景



(2) 造構検出状況



(3) P1セクション



(4) P1セクション



(5) P1完掘状況



(6) 完掘全景

図版5 川崎山遺跡d地点



(1) 遺跡遠景



(2) 調査前状況



(3) 調査風景



(4) 遺構検出状況



(5) 遺構検出状況

調査組織

調査主体者 磯貝 謙吾（八千代市教育委員会教育長）

事務担当者 村越 利光（八千代市教育委員会生涯学習部長）

石毛 幸治（八千代市教育委員会生涯学習部次長）

実川 審（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長）

小名木伸雄（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係長）

秋山 利光（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係副主査）

常松 成人（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主査）

調査担当者 森 竜哉（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主査）

常松 成人（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主査）

宮沢 久史（八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主査）

調査補助員 三浦千恵子 真坂 信雄 阿部るみ子 野中 則子 石森 秀子 斎藤 文子
田久保松枝 落巣 昌子 遠藤 知子 立石 勝代 烏羽 良子 寺澤 洋子
原田 雪子 笠川千代子 室井 恭子 矢尾ヤス子 小形 幸子 澤柳 安子
熱田さだ子 热田 節子 石川 あき 斎藤 千代 鈴木 一代 鈴木 時子
立石ふく子 立石みね子 豊田 八重 村越美津子 山口 栄子 山口 ひで
吉川 志代 立石 春枝

整理補助員 川島すみ子 高崎房江 田中洋子 見神光恵 長田京子 植田正子

事務員 三宅由美子

千葉県 八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

印刷日 1998年3月25日

発行日 1998年3月31日

発 行 八千代市教育委員会
生涯学習部社会教育課
〒276-0045八千代市大和田138-2

電 0474(83)1151

印 刷 株 金子印刷企画